

はじめに

「栄養は大切」、これに同意しない人はいないでしょう。疾患を抱えている入院患者さんにおいてはなおさらです。私たち医師は、疾患の治療をするのと同時に、入院中の栄養管理についても責任を負っています。個々の患者さんに最適な栄養療法を選択して実践しなければなりません。

しかし、医学部のカリキュラムに栄養学が組み込まれている大学はごくわずかです。私たちは何ら系統立った栄養学の知識をもたないまま、現場に放り出されます。いったいどれくらいのエネルギー量が1日に必要なのか、栄養素の比率はどれほどか、考えたこともないかもしれません。かつての私も例外ではありませんでした。

「栄養療法」というと、糖尿病食や腎臓病食などをイメージするかもしれませんが、何らかの理由で経口摂取ができない、あるいは治療上絶食が必要な患者さんへの栄養療法こそ医師が率先して行わなければなりません。身体が何とかしてくれる？ 病気だから栄養状態が悪くなるのはしかたがない？ そんなことはありません。優れた経腸栄養剤、静脈栄養輸液が揃っています。あとは医師がどう選んでどう使うかなのです。栄養剤や栄養輸液の処方“なんとなく”行っても、“できてしまう”こともあります。しかし、それは本当にその患者さんにとって一番適した方法だったのでしょうか？ そしてなによりそれでは応用がききません。

本書では、悩める研修医の栄養療法で直面するさまざまな疑問や問題に対して、各種ガイドラインや関連論文を根拠に、そして20年間にわたって実践してきた延約50,000件の栄養療法の経験をもとに、栄養療法の基礎から、経腸栄養療法、静脈栄養療法、そして各種疾患時の特殊な栄養療法について解説しました。現場ですぐに使えるよう、症例をまじえ具体的な記載を心がけました。本書を読み終える頃には「なぜそうするか」がわかり、自信をもって適切な栄養療法を実践できるはずです。

患者さんそれぞれにあった栄養療法が実践されることを願っています。

2022年4月

福井県立病院 内科・NST
栗山とよ子